

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 5
- 04 特集 ジェンダー
笑顔で明日を生きる
- 06 GBV廃絶に向かう世界の潮流
- 08 暴力や差別の被害者を支える
警察官になるために アフガニスタン
- 14 被害者に寄り添い、
ともに歩む 東南アジア地域
- 16 立ち上がる女性たち Live Our Lives タイ
- 18 環境配慮型トイレで、女性を守り、雇用を生む インド
- 20 GBVの研究で
廃絶の道筋を探る ウガンダ、南スーダン
- 22 高橋尚子さんのタンザニア訪問記
道を切り開こう タンザニア
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 4
ボリビア
- 26 ザ・研修③
目指すのは正確・中立・公正なメディア
- 28 地球ギャラリー Vol. 126 ベルギー共和国
写真・文●佐藤 潮 カメラマン・ライター
歴史を重ねた二つの祭り
- 34 教えて！ 外務省
知っておきたい国際協力⑥
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol. 6

自分の人生を 選べるように。

プロローグ
Vol. 5

文・並河進



イラスト●中村知史

僕の途上国への思いが芽生えたのは、2009年。初めて訪れたアフリカ、ウガンダで、初めての当たりとしたスラム街。ゴミが散乱する、家とは呼べないような薄暗い小屋をのぞくと、マリアに罹った15歳の少女が、自分の赤ちゃんを抱いて、苦しそうに寝ていた。

NPOやNGOの支援対象地域にもなっていない、政府の支援の手も届いていない場所。

この世界が舞台で、先進国の生活は舞台の表側だとしたら、その華やかさの裏にあるものを見てしまった、そんな感覚を覚えた。

今まで、広告会社のコピーライターである自分が持つスキルを生かして、いくつかの企業の社会貢献プロジェクトをコミュニケーションの領域で手伝ってきた。その中には、途上国での支援活動も多く、何度か、アフリカや東アジアの国々の支援対象地域を視察した。また、JICAの協力を得ながら、健康改善のための啓発活動をインドの農村部で実施していたこともある。

だが、支援対象地域があるからには、支援対象地域がある。何かをしてあげることが、同時に、何かをしてあげられないことを意識することでもある。

ウガンダから日本に帰ってきてからも、僕の心の片隅には、それからずっと、「彼女とあの赤ちゃんをウガンダに置いてきてしまった」という罪悪感に似た後ろめたさがあった。

* * *

その後、2011年、東日本大震災が発生したとき、僕はいてもたってもいられず、すぐに宮城県女川町に飛んだ。避難所にいる子どもたちのた

めに絵本を届ける活動をはじめた。自分の中で、「罪ほろぼし」という気持ちがあったのだと思う。あの少女は救えなかったけれど、いま自分が守れる子どもたちが東北にいるのではないかと、と。あるとき、こういう自分の気持ちを友人に打ち明けたところ、「罪ほろぼしなら、いつか、ウガンダでやらなくちゃだね」と言われたことがある。はつとさせられた。

そうだ、いつか、ウガンダのスラム街でやらなくては。自分にできることをやらなくては。

あのウガンダの少女は、自分の人生を選べていないのではないか。自分の人生には、本当は他のどんな可能性があるのかを知らないのではないか。スラム街を訪れたあの日に、自分には、本当は何かできたのか、何をすべきだったのか、その答えをいつか見つけられたらと思う。

並河進(なみかわすすむ)

電通デジタル 執行役員 クリエイティブディレクター、コピーライター。電通新!ソーシャルデザインエンジン代表。企業と社会をつなげるプロジェクトを数多く手がける。2018年度グッドデザイン賞審査委員。京都造形芸術大学客員教授。東京コピーライターズクラブ会員。ACCシルバー、読売広告大賞、広告電通賞、東京コピーライターズクラブ新人賞など受賞多数。著書に、『Social Design 社会をちょっとよくするプロジェクトのつくりかた』(木楽舎)、『ハッピーバースデー 3.11』(飛鳥新社)ほか多数。



軽やかな衣装を身にまとった女性たち。南スーダンのマラルカにて。写真:久野真一